一二三草

1.4.30
2

芳忠

遠門 1.4.5.0 2

寒温奇談一二草第二卷

二　菊麻通人と寡人蝶子媛と魅こと話

昔生いづまの時のや大和よ皇城こうし沈菊麻通人と
愛のへーハ紙角のこ伝より大学寮よあうく人その歩を
貴じ。十七の翁といひたゆ者ま人自も負てすこと
世城悔うるゆく。常よ声ゆるく。ゆの言ゆるゆ人ハ年ゆを祝
浮さび。ゆ常策及第の至あまども。受領地位の沙
法よ及ばず。学者ゆとゆ。踏迷乃別ゆこと為ゆ
功名のんを放ま。愛い程ゆく。知ハ藤侯よのこ吟神あく。
容貌優雅うして眉清く。目秀。ゆこを好ゆこの哭ゆまゆ。
大云して美人ゆよ。ゆ称すべき程ゆと自称しゆる甚挟ゆ

大内の批判するしうゝ孫八父不真〳〵て衣を逸き別室の門
戸を閉て逸よ住たびりり。邸〳〵と夏の秋重庭よ風波亜へ
異を凌で。ひゝうさ月をおゞえ居るよ。秋既さ三更に
向ゝも。さゝバ卯房よ入らんとせるふ人家のおうこれるうて。お甲こを
なして簾の愕家の僕より。中の中ゝを閑規るよ。一塊の雪のごと
ゝの惰くゝゝそうこめくゝ。桃の上よ鉢面ゝう書籍ども旋繁
乃下に丸ち巳打うゝ見る動静を見沈し。通人声うく唱て
怪し曲者うるといされ。此曲者様るのごく丸出る正をこ安よと
組ぐ抱搦るよ。そのう孫きて。第乃屋のごく。孤然と院出へる
扇し紙燭を翫る。白皓光燦き眼を射て通人毋屋の簀ようう美
倒よ指び落うう附。紙燭の小りの微しく小あうて彼曲者をる

よ小あよ以縛りて廉わよ門出ゆる。これ彼のよ曲者邪丸仔脇屋
丸といへ以来望るのうこれ〳〵若亜まへ丸二三十人分と笑へる
小様合ゝうその簀力等考ゝ〳〵と守ゝう曲者の素様胡
椒法市を捜りもそくこれをんうよ。上ゝへ崔の数毛衣よ紙乃
帳をゝれ虜よハ白綾乃。中ゝれる屋を忍く。紺の帯るぐく
結びさげ。其数波凡ゝうとし。云眉みわ中ゝよ正髪のこ海
ゝ〳〵て天のなる業質ゝよ人乃数六
見へゝうう。通人方拔没立踏て脇を法て云月夜ふ飾素の
復をそこ門戸を穿つて如乃孫雇病ゝ中と帳さうゝう。貴へ
あうゝ。仔ゝと千方ゝ模倣。虫人乃女ゝも笑へゝ由孫あゝハ
中せてあうふ。毋眉を揚貝波財ゝ云妾ハ卅布よかゝ虫人数を道

人よりて。ものがたりを安磨自給の吉の左うひて秘蔵あるを奪て。
手賜らんとあ寝所を出して法華経の通人
声々ろ〳〵よ拾て云我家の宝蹟を宝物にあ申さ言ろ〳〵
係史みの紀国より和よりんより。法ずるるあ。今貝を明白より招出べ
女徽西天を廻り貝を倒よするか士有ととあんで鳴んぐあや
まつ〳〵斗魁。狐狗をむ事。かく縲絏の辱めをかうむる星
皆物の宝数すして。我御の母と一あ〳〵ばいろ〳〵通人眩と
貝〳〵自ちん合られば。女面をむまて貝をも撮て賜い当晩ゆう
あり。夜ふ半〳〵ろ。公ふくきまでよ通人精神法華として世ふい
かゝる美人もあまびあるものろみと。幽中歩よ嘆息ろる。公のり
私のそろ〳〵ひがまるせば。女を仕の廉よで涙しろる。此年頃〳〵秘蔵

懐のでく新う。海上注来の皮物を集め。或い数異よ綱を
ぶく貢来の美男あ〳〵く奪ろ九人氏の私我を装ろる
者仏よりあ。坂豆渡虐し〳〵。都も物怠ろ朽ろ。宮
帝有の注人ありと。備つ経るあ事とを海豊を数同あ
ま〳〵女美よ自ばして云今九列よ粕夜坊とふる海賊
豊を結び陸奥よい地地大〳〵とふ山賊紀ちを分て西ふ
接りすることの凡三の人其ぞ紀を繰ちを自巻山と潜
呂〳〵。中国の大る軍として。金豊山の東南よある西の
奥人ぬ白波谷といふ。阪として海女の法豊庄へ
徽備のくら〳〵なるの。我ちばいひ早て。ふ〳〵びいろ麦ろ
ごと云ば其大云雄兵天下度の女。いまで紀保よ戦ざる

ほ来の僧あよをだ〜とて。宝を律よ倫ゞて。別よ漢巻乃
死刑よ考へらる。此る事ゆ〜んべのはよあって。一代乃覩視と
いひてあを。諸や犬咽れよ照をるゆ〜しへた。千日八天伝て
慈るよ似〜う。見物乃半諸。さ迷ゝよ元く。車八穀壊人ゝ産
慶て我人より弟よ出んと爭競ふ程ゆゝる例ゆ〜さ女の身よそ。
いゝゆゝる嗜手の者ゆゝる。その頬竈の伝手帰〜〜んと愛ゆる
者八角も生。牙をと貫し般若とよ鬼乃様よ恐ひる
ゝひこれ優さ女乃。ゆ上よ面給せ〜れ。日ゝとゝや辰の下り
ゆのお芝居乃新ある安悲や山人のゆゝ〜ば。寄ゝとゝゆる
ゝと恐ゆ〜ひ〜ゝ見て〜る。嗜処ゆ。今年の地獄教人場一朝乃
嗜ゝとゝゆ。これをん安ゆゝ人ゆ。俗ゝ衣を優され袖を落さね

者も色既々通人ゆひゝう。姫嬢の下ゆ書を寄て。弟竈爲人
をゝひゝ〜ゝひて。ゆゝ〜ゝ仲儀眼ゆよゝ〜ゝ〜ゝ。今ゆ楽ゝあさ
まゝ。雑ゝも視ゝせあて恋ゝ者のゝゝひ生ゝゝもゆゝ。我甕湯の
邪業ゝゝをなゝて人ゝゝのゝゝ。堂ゝ彼教人場よゝゝゝ文月も
ゝゝの闇夜ゝ恋ゝゝゝゝ雲ゝゝ元雲ゝゝ光ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
神ゝゝて移那ゝ集ゝ。嵩ゝ嗜ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
行ゝゝ渡ゝ。働ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
厨ゝゝ。ゝゝゝ仮楽ゝ。我ゝ意ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
殺ゝゝ云。体ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
試ゝゝゝ。女ゝゝゝ。君実ゝ我ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

あ〜ばらや吾儕雲に踏り。雪よりも高くの御ゝ洞徹。宰獄繋
まてうども。あんぞ従まざ〜んぞ天命をのがれてやうくしけれ死
ぬおぼされど年来貴を練の功むなしうして。気を除悪を体
神血を丹田に養しうるゆゑ。生れ死しるれども。神気いまだ
衰せず。君幸に我を救ひ給へ。通人やがて救ふ雅し。通人
ほを指ていよ〜〜強うさ。我徐行をんうるでぐ。ようと喜みの
重をさる。我初て体をうんてしよう。ようよ顆方顆のおもはく
体を起ふ。嬰の眼よ。涙肉は女をうんきいむうるのあるこられども。
ほうよ天下の一婦人ゆうるをさる。素より婦人虚称するに足ぐ。
いあるに成ともむひとまべし。況や技智好巧並に成るのうるに雅
をや。夫人の世に處る教ふ易比をるものれし。我体が為教も此

や行うせん。今日公の罪い罪〜〜後〜是別人ゆう。その殺べきゆう
ゆゑあると同じ。女云ふ〜〜い仕換せん。君公をよう〜〜収て身を
身拭ふ〜おいうんよその白死。ゆ遠も懐義べ。忽家を離して
死ゆん通人行〜〜て。甲衣の袖まうりけて拷木の縄を身。塗塗
抱住く枝ひとふ層凝る時のごく。地よぬめりて。躯血和井とく
ぐ子。千財通人大ふ遠〜うよ女ち〜〜よ神乃よを変ぜ〜ていふ。喜
ゆ〜〜び泣る事を得〜〜。行傷にを吹〜〜おいべ君も命を玉ん。
通人これを縋〜〜と縋ゆう。女ま〜〜把つ〜〜る内役の肉干ずりを
截〜〜宏これを〜〜〜べ。義人の伝儀を得ゆん。通人大ふ怒〜〜翌つも
女子〜〜を抱〜〜かく〜〜まで〜〜よ喜を憐むの心を厚ふす。君ハ義乃
男牛乃義人ま〜〜風源義ゆの士。義命ゆ〜て年仕ゆるを〜〜安ふ

使ひまゐらせ君が命令よむべきなり。彼秦山の巣窟
とは堅固の要害にて不虞の使をなす事。安人の謀に就ふ
とぐらを拼よへんとて。あたれるの癲圓を写出す。客よ竊使を以
君の寢所まで抜てくん足を熟視して居。山寨を攻るべ。君大に喜名
を賞へ恥ひあん。通人これを聞て。富を功名にのうせん。只保一人を得
ば我宝是なんとの。女咲て婦の性は志能に心あるものの。君
よく能知るや。通人答いふとも婦人の情は未偶のごとし。弱
人の器に使ひて方もなるべ。さるにても先保は何ぞ
人で博奕とか使るの。他日奥へ帰るの節よハと孫しる
ゆ。ぞ〳〵の壺き波まで遊士乃
あそぶを見んとなり。さひそまし

と山帯を汲。再今れ撥と毋ん。穴阪貝人よ泄しの人を云徒て。
早くを取あり。通人さに沉吟して。秋の帰りるゞ千和爰
初〳〵とあり。芝る枕の上よ博ふが河乃。実も空しうで大悟の
図を布ゑ〳〵。初りこれば是山中の地理勢。その伐色さ
進退河よ使人のせう。通人奇〳〵の抜のひちまを。秘して人も
河〳〵。千車〳〵あり。佐公よハ三槐九卿。那と宋して。
さる色於武士よ抜ふせ〳〵。軍物を復し賊徒寒く追冥
あべ〳〵。車よ抜りくあり。呉見遠〳〵して其従端多。
時よ通人来堂よ左く。言を立るふして曰。今や国家中を安る
の舟。海外の俊よ漫よ函器を〳〵。さんや跡よ山事城塞よも
を賞へ恐〳〵ハ諸の小倫。殘散ん豈窩盗乃あよ無〳〵伐

勅さんとの仮。有司の恥辱をこのゆゑにこれはもとより。
我よりまた人の行ひを添。追捕無法使は場所所なる織部を搦
捕。根を絶。禁を枯とげてもくるめんと一定仕候ものゆゑ
ゆゑ。問ふ侍ども。古老の人。通人を顧て気づかし。和殿事を
なげよゆゆしきこといくども果して心中に苦の深器ものを問い。
大なる矣をいかん。老人いくど無気の言葉と遠あらん事我
聞れてあるといふよ。満望皆右ちくんと云ハれ。千財通人情ハ大まの
言ハ邪ども追ひとりて其勇猛なる気象を問の大だちづく
相ハ。雇あり。が。けふ山要の西まで搦物。何ものの事ニ付ハん。
再ニ金後して支度帰すハ拙ものも似ようとく先と浮容あり
安ニ千人を撰て直ち宣命を加ふ。通人回天の気を去ぐく。

ひとりを西に。向波谷なる不迫ていふ。五十人の皮長をむかへて
保ら二十人追ひ乃末の後岩の下に隠れ我俗て山を上り。今夜
織徒の熟睡しる処を伺ひ。そ火を呼ハ。寨外に出ハ相岩の
隈をあらくん。千財根無蔓原ハ火をさとり。元来山中猛賞
保ら三人ハ墓所も討ひ。保ら二十人ハ搦ひに出ひて。わ
まる処あ〜ハ討ひ。保〜十人ハ山乃半腹ハ。間乃ある洞穴
あり。此ハ山ハ待ち人ハ近つハ岩屋しる織徒。山上の変を視ハ
必定俗ハ来ん。千財一人とのぐ。千ハ如ハ〜せよとて
示し合せ。千財ハ勇舎九人の徒。五人藤人騒ハ歩移て
時乃天ハ。彼山寨ハ海岸ハ踏半場をめぐりて。山の上ハ
進乃ぐとき織ハ九人三人ハ来る。通人踏の侍ハ

跪きゆを束ね。こは八年ごろ奥州の。太郎殿の被下に作る一方の長さも仕し者ごとなるゆ。山度ひ立く。ねゆ。ゆ。ゆ。

をも知らぬ世変によりて流落し、坤地軍閥の塵乃より
身を投じ安楽乃楽を極久しく大王の愛沢を仰ぎ奉る。
上の顧盼を蒙り、永く山中に留まれば、彩霞の働を望見べ
き我ゝ山を離れ、蓬ヶ嶋へ。蓬ヶ嶋の壮士、迎へ来れ
ふ人とこゝに、ものれば通人をそなわり来て流よ亜を頂戴せんとする処を
本分ぬくゝ見せびに切れすうう。通人苑老さらて手体すれば、ふと
大口あいゝ打笑ひ天晴無双の男。八ムの事卒してあゝ居りしよ
らく、主人より一献を企るに、献酌の逆を乞うず。猥藉ふひゝよ
飲ものゝ酔ふ。ふ。占泥のごとく爛酔して、亜を教せるごとく倒れ
うう。時うう報の声を聞バ救すべ及び。当亜の攻撃
山容沈勇くふ出さう。軒艦の音嵐のごとく。今ハ亜の国ふ落す

陸しうとと。三人手に手に三の猛物より。物の久く先出身を固め、夜亜乃
老城数人を刺殺。一人ふ安青さを奉ふ。亜を霧くは
いゝ辟ふてあり。めは其時奥合邦丸の修羅丸神亜て。亜一と組亜
世とす亦を山を岸波と起上り。二人を左右の拳ふ按で仆の
蘭縛を踏人せべ。暗完ゝ完ゝ。跳のごとく奄天井より。大盤石
動じ落て通人亜兵ふ危うう。危くも起うう時。急強うて呼吸
一変ふ人一数小穴を縦ゝ。亜味方ふ苦をたゞで。亜と喝く
孔へせゝ。辺お或ハ家ゝ人猛伏井亜て。亜則そをかく新のゝ
冷じく。其ハ再ふ組て落ち。其ハ刺ふ子ゝ家暗ゝ猛者
ハ山ふ奥へ。器ふ害て大地到者ふ。ふく振いで。敵中旋廻るごとく通人脱
晏。先ふ御。右ふ宗ゝと。四ハ山ふ立り。空て。ゝ。ゝの一万人疲倒

法の如く処女を雑怪の中に入の女房おのれ
織が希ここの風后徒の中に落ぬ。偏や生死の手を
つゝひとりて反平をつゞるゝとゝ。怪火過のしろに
撞てうんぬとと此いぶくといをもゝず。女房いつゝ。君岩に立入
しかさのふ乃中の赳乃ふ沈ふ子の乃に及ぐ。織寨を去て
三里ばかりもゆゆしろ。沈りゆくうちに合浦に切て進ぐ。
寨山五金剛力士の第ゝうんぐゝ。奥合拔二の俗羅に乎。上を下へ
伏こつ。力豆ゞ狂操合金拔ゝひて。こゝうゞ。寨山五ゆゞて奥合拔
を拔て。宮屋に接伏ゝひ拉よせんと手。了俗羅丸ハ〳〵就さんと城
命ゝを。こゞ撲し拔りこゝふ。通人ゝ。ゝてゝ。大よゝ。
つぎゞゝ。二ゝ。繰り。紂いゞを矢部ゝ。了俗羅丸をゝて振向。寨山

足を備とゝ。走く射拔ゞゝ。こゝ云ゝ。ゝまちゝゝ。と。
雅を那五し殘ゝ。ゝも。寨山を大喝ゝて二人を屋下へ拉
大ゝを擬げて。遠然と手ゝゝ。小賀者ゝみまゝく。所ゝゞ。
罪ゝたゞゝめて。悠ゝとおゝこ去る。通人ゝれをゝて。寨を犯ゝ業を切て。
命居ても。了ゝせんと。ゝゝを。勇んとすゝを。女房ゝゞめて云。此豆怜と
二ゝよゝあゝ。君織練の御ゝ。ゝゝ城ゞゞゞ。山人ゝ光ゝ注寨して
深ゝ。ゝゝ。寨ゝゝ。ゝ乃俗ゝすゝとこれを雄嶽ゝゝ。ゝの。ゝゝハ
逆後して雄嶽ゝゝを。ゝ山嶽を。ゝゝ。ゝ。ゝ。ゝゝ。ゝゝ。
その險さ。容易の路ゝおゝゞ。君ゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
進退を已ゝて云。寨山を勞ゝ力ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。

とと〳〵といひて。先よりもちて。木の枝より元分。岩石を流て七八丁ばかり
出このぶ。此時通人。持力疲れ。よく足痛。こゝ行ん佐よ所行御。
荊藤より御を中ばかり。乃ゆきあづむ。たゞ〳〵とよみよ。女皮立のふて。君が
勇猛なる。出羽の峡〳〵。ふ八住ゐ。通人ぶりを知ずとせ〳〵。おし〳〵も
所ばかり方ゆき路の渡りそ。ふたてよ。宋流〳〵てゐる。通人八谷底ふ出て
眼眩くなる。御山ふ乳つき擬樣を摩るよ。すて〳〵を捨ば〳〵痛ゐく
ふ〳〵を繩を以身を裏こ拉ばるゝ。ゐりゐるとあ母〳〵まれ岩尻を向上八。
その方ゐ以す数〳〵文言腑よなゞれ〳〵う。いま〳〵女皮岩に立居く。足ようう
ハ先を出して以ゐ〳〵やゝいふ岩ふ出て通ゐる岩を。紙てうん〳〵ぶゐる。
つきやゐる。浮山幽谷の狩山狩なる沙面ゐとゐもあ〳〵ふ。たゐ〳〵ゐ
跌ゐ乃ゐよ落こそ。流れ〳〵ゐの乃ゐ。通人ゐを掬て流ん〳〵ゐ元抱ゐれバ

ち〳〵といこぶ。ゐ玉ゐ乃中ハ二ゐ乃ゐを半ちゐ
流ち〳〵のゐ。ゐ渡りを通士乃あそぶをんとゐ。さひとゐ〳〵
通人ゐ〳〵ら。これ地見獲ゐ。ゐ〳〵ゐ毎の時乃ちゐ〳〵ゐ。ゐこゐ抜ける
弁ゐ乃。枝ハ岸ゐ揺ゐるゐ。ゐ〳〵ゐ。公乃ゐをゐこもゐ。て山流ゐ浜て
ゐまゐハ岩石ゐ所ゐ。ゐ乃事ゐ流ゐ。ゐ〳〵ゐ。ゐ〳〵ゐ国
穴道ゐ。ゐ〳〵ゐ。ゐ〳〵ゐ来ゐ。ゐ〳〵ゐ。ゐ〳〵ゐ。ゐ〳〵ゐ岩
立ゐ。ゐ〳〵ゐ。ゐ乃ゐ。ゐ〳〵ゐ。ゐ〳〵ゐ。ゐ〳〵

布のごく。薄く侍ると紅緞の毬と仲哀。金渥の幔幕風に飄て天地悲哭
花雪と軟まび雪と散ぶ。ひらと桜樺蝶蝶と閉こめられ蓋香天に散満を。
牧目とあやぬ白ひ芙蓉を凝ら。桜ひ彩と天くしらぶ。美麗の女房
数十人こる見て花に恋て蕭つて肩連をくらべ詩を吟じ高を
うらひ社をひらべし。興をめくらすとこれいそと。初綸の錦のうつ
桜ひ紅霞後の香よ漂て紅人乃ぐ。ぱっと桜を風せば
丁丁。失れうる女ども。お狐山魅乃新ゑん陽らぶ矢先に鏡るそそく。
矢東元て立むと付。以おの女皮進ぐ。よを指くこれ。さらく。
魔緞化生乃ものにあらぶ。今日しも君ぐ山中に人の女の日ゆと。客客
三月三日乃三月三日乃三月三日べらに曲みの高奇を投くいざやきこめさんと。
通人よえもいぬ酒食を喰ぶ。紅人の酔よ和し。花を拝し待を頼ま

よを携へ通人の花のよを投てゆく。こよ日西岳の月。月乃奈
生ぶて一芸の技樹よりまれ乃山中に猫ぶ。猫も天空の石
橋。翼門の徒乃樹も見よ待ぶ。通人ぶ世んと通人ぶ月
くあくよ。女房を人乃も怪く。そこ里ぶ乃ひと見て。別よ
天地乃一世界にいる。忽ち宮室山岳よ出ぶ。長廊谷岳よ出ぶ。
芸て万樹穴よ出ぶ。地より湧よ山ぶ。ものゝ見しきを入れ拾も
宴殿のかゝと翠屏優ぶ。堂上に公ぶ殿上人階下に六百百百
その儀謝整粛ぶて列を。これ詰屑目貌世ぶ。もくゝ見ぶ。
これ屋剃乃王宮も来よりくゝと。さくと容貌自尊の通人ぶ。時
堂あくひて絶ぶ見あり。女皮をみよを接て階を上ぶて通人貴自
見て踊。時よ翠屏の中ぶ翠屏の中ぶ宴美のごく。ぶ中くゝ。よを出て。

通人の面をしばらく打まもり。清暁の女声にて。君を待ちんなどうの文といふ
ものを。手にとりて濯ぐが如く。通人うるさしくと。低頭して戦栗
居る。費傷の居よう。さてしもて云山陰の志は労ある人。中湯をうせ
ぬへと浴殿にいそもあひ。既に浴し。扨て殿と。通人。夜をつけて殿と
云り。通人。夜をつけて殿と云へしきりに狂御坊く。藤く事に心
碎くなり。数多の女房をとこれよ笑をきくむよ。通人面々のごく
なりく宰相人乃怪奢恐まあり。志をうるに千空を退人来ば
求るに女房を立ちうと。紫雲の義比母矢の花を佛ちうへよ抑り
除の几帳をしまちそひへ迫きぬ。今夜ちよ浮奇世界ぞあ中
ここそもとれいいみ宴に宴にあるぞ。撞手に見く満屋の高を
強迫バ谷よりたふ成ぞ月。山沢と達り行く。神楽中叫れ。

而殿の方に出て。愛法の夜をうに乃家を参し。完名板々正用も
あり。ア夫人一の夫婦人。繍帷の内夜を退行の猶を家。久を牛の冠を載き。
微笑ふ。後ろ姿より。特光彩睡まばゆ。通人。還元ぶ。西よ立屋山の
高容云。賞揚華城洛門の羅帷貴よあ次くいふ事れし。彼方葉洞の花
芳かばるれ。柔鹿蔚の香。氣氣。殿方酒宴を帯て輝怪と玉山の
風くとり去の除てこのうさ夜で懸玉りんとよを執く戯る。通人手仰し
て倫月よ看まバ二れ妹妃嬢なすれど。人よ孫て志ぐ云ふし。嬢見
夜を細ふ。部表毎も快くそ泣ます。高君よ別くよう山よ降り
紅雲丹を復して再生を技し。續骨膏に補ふ。膚本に保せと
夜を毎く月つぎて。面乃狼剖若ろ玉を人すに。実も疫合くおも
癒さんせざるみの奇ろる。通人そもせいるみる仙人北歌のうちやと

山に入て西王母の道を学び形を保能を
弥て其の生を益す事を遂ん為なり。素問に天は昇れ仙を求ん
霞しき山にこもりて年経ぬ。我も志ざし近き海人住来して
塩木を取り汐を汲い。汐を汲いよく世を忘れ乃ち事あらんで密に君に拒
乃ち火を拵て今日所となす。五十人の友卒も共に煙となれば山中
君と為とのみ。今只何ともなんに逢ぬし。あぐらく我山にこもりて天
年を示おん。鼓君が資性ように傑勇怪奇にして数多人の疾
つ。雖歌のごく芸人なすに却て充り。年齢を凌ぎ人の役を折き。
江を傳ひ。ろ世に小名を揚ずとゝ人の人に庚まる。
これ世乃中の矣嫌人にて文に泥ん。学見の弊とゝ。いんぞ肩伐
掃の我ん。婦あまて同腔て中心乃接て岩ま三の事ゝんやゝ人

蝶見て傷を推倒られ。ゝ源く舟に沿ま。汗出背に流れ
時に蝶見を引き捕に義り。君に敵に按俗の標あり。ゝ
至に気稟の義を昧ま。只山にあり。久雅風流も家に乃ま来い友階の
ゝ人はさん乃つも谷川の上あて。ゝ上のひ鰯こそ。ゝく偕老の抗ま
しゝかといふ其眼ゝ中ゝ事ゝあり。通人を図我丹雅学ゝ安ゝの
俗を沼て美人し情を陶し。遊を後に せ。ゝあを とめて大ゝ ゝんぬと
いひもあげゝ後の九性をたてゝ毋て出ゝ三ゝ出ゝ。大ゝ怒て云
小逆ゝいんぞ変に来りて不義の振舞をゝ。御意倫屋の屁ゝ
らびまく戈弁を宴んや。ゝ世間ゝ代ゝとの通人ゝ怪ゝ者ゝれ
ゝ舌を出ゝくいゝゝゝあり。ゝ出ゝ五力を揮て ゝ一刀お。貴ゝ ゝすと
見れば通人叫ゝ。忽ち。眼を刺ゝけべこれ一枚の変ゝて侵ゝる谷の

中に怪物ありて形ありて遍身に毛生ひ汗みをあぶりて探る手
を放てさらにあらざこれいふ爰まで知らもつきぐく。我所よりのぼるとすれ
ども士卒漸ふ身集り五六人目と目を合せられど物いふものあらざ時猶
強りて陣の風猛く振ひ吹き来り帰りあるて赤くに至りて急
なりて後より追来るのあり。もしそれば蝶見るり世人を猛き宝を捨て
去るのふ士卒するありといふを通人ども。これ手負の足跡をたどれば
さ〳〵矢て肩の生るを抜て斬つまべ。蝶見るの烟とあるて立昇ぬ
故ふ帰りく通人へ。邪鬼なるよ魔物なるし。此事列狂云
あるんの法華も山よりあるの三日。怪物乃乃一日も手負を
見るる者ありく。皆山乃墓に泉に中らまて要害して死し。
後世自浪谷。伝の此の怪るや。名を見へ来るし。検没かさ

祈りく。南山へのがせるるく。雲霧頂を遮りく暗く。岡室
に。障畳りて身へ見さ跡あるとりて岑を巻そなりて再三の
洪水よ及ぶ。そもく其所者るるる。伝乃所変を無へ。
或ハ九傳よ此云。法眼乃鬼といふるを乃。